

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

タンザニア北部における呪術師の勢力と地縁集団：
口頭伝承を中心に

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-03-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 和田, 正平 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00008333

タンザニア北部における呪術師の勢力と地縁集団

—口頭伝承を中心に—

和田 正 平*

Power Struggles and Territorial Groupings of Medicine Men in Northern Tanzania

Shohei WADA

Over a six-month period during 1971~1972, I was able to revisit Hanang District in northern Tanzania and carry out an extensive survey in order to compare the Iraqw with the surrounding tribes, particularly the Gorowa (Southern Cushitic), the Datoga (Nilotic), the Mbugwe (Bantu). As result of this field work, for the purpose of understanding contemporary African tribes, it has been found necessary to throw light on their past. Generally speaking, the history of the Southern Cushities, Nitotes, and other related groups, has been reconstructed mainly from archaeology and linguistics, with the utilization of oral history hitherto largely neglected.

The purpose of this paper, therefore, is to illustrate the process of tribal expansion and mixing through the medicine men's struggle for power, by using oral tradition as a useful tool. According to traditions, I think there are four historical stages of expansion of Southern Cushities as follows.

first stage: Integrated as Southern Cushities, locating in the vicinity of Kondoa-Irangi.

second stage: divided into four tribes (Iraqw, Gorowa, Burunge, Alawa) at the foot of Mt. Hanang.

....The Datoga attacked them.....

third stage: confined to an extremely restricted region (for example, Mamaisara for the Iraqw, or Gallapo for the Gorowa)

....The Masai cattle raids occurred frequently.....

fourth stage: extended to the neighbouring land occupied by the pastoral peoples.

....German rule was established....

In each stage, peoples have been territorially organized and politically ruled, through the relation of the giving and receiving of medicines with various rituals, by foreign medicine men—the Datoga, the Isanzu, the Irangi—except in first stage. It is most remarkable, in the third stage, that a rainmaker of Isanzu origin was welcomed into the Iraqw and Gorowa also. The clans known as Manda Hay Irqa or Manda Hay Bayo and Haryambi in the Gorowa although originally from the same area and having the same ancestors, have gradually widened the spheres of their influence with the expansion of these Cushitic peoples. The process went on throughout the German period and continued under the British colonial administration.

Expansion areas of the Iraqw had, by about 1900, included nearly the entire Dongobeshi area regarded as being primarily the country of the Gisamijanga (subtribe of the Datoga) and perhaps by 1920 had reached to the Barabaiga region (the most territorially defined subtribe of the Datoga) in the vicinity of Mt. Hanang. These settlers have established regional compound communities together with the Datoga, and have vital common interests. More important, the peripheral Iraqw has begun to be linked with foreign medicine men—Geragendo

* 静岡女子大学

Gidamowsa of the Datoga, Muna Sora of the Gorowa—both organizationally and ritually, due to the background of social interaction. The social

character of medicine men has been steadily changing, though the peak of ritual leadership has been based on tribal bonds, in northern Tanzania.

はじめに

- I 南部 Cushite 系部族の神話時代
 - 1. 南部 Cushite 系部族の成立
 - 2. Rift Cushite 集団の分裂
- II 南部 Cushite 系部族の歴史時代
 - 1. Iraqw 族における呪術師の起源
 - 2. 呪術師 Manda クランの成立
 - 3. Manda クランの発展と Manda Hay Bayo の成立

- III Iraqw 族の領域拡大と呪術師の勢力関係
 - 1. Datoga 族呪術師の移住
 - 2. 植民地支配と呪術師の処遇
 - 3. 国家統治組織と伝統的支配の交錯
- IV タンザニア北部の呪術師の現勢
 - 1. 勢力圏の重層関係
 - 2. 領域拡大と呪術師の移動

はじめに

筆者は、1971年9月より翌年3月まで約6カ月間にわたり、東京外国語大学アジア、アフリカ言語文化研究所のアフリカ大サバンナ学術調査隊に参加し*、三たび、タンザニア北部を訪問する機会にめぐまれた。今回は、かねかね継続してきた Iraqw 族の調査を基礎にして、隣接する Gorowa 族の領域にも足を踏み入れ、extensive な比較調査をこころみることとした。両部族は、言語学的にはともに Southern Cushitic に属し、日常の基本的語彙はほとんど共通であり¹⁾、部族は異なっているが、媒介語を用いなくとも意志の疎通が可能である。また、同じく半農半牧型の生産様式を採用しており、文化的にも高い類似性を示している。

それ故、一般に、Iraqw 族と Gorowa 族は部族的起源を一つにしているといわれてきたが、しかし、本格的な人類学調査によって両者の類縁関係が実証されたわけではない。言語学的には、Whiteley, W. H. によって、タンザニアの Cushite 系四部族の比較研究が行なわれ、精緻な分析結果が報告されているが²⁾、それは、Cushite 系部族の歴史的諸関係を暗示するだけにとどまっている。筆者もまた、主として、機能主義的な現

実分析を中心に、調査を続行してきたが、現存する部族を理解するためには、過去を明らかにしておく必要があり、人類学的な立場から北部タンザニアの諸部族を中心に通次的接近をこころみることとしたのである。

しかしながら、文字による記録を残さなかった部族社会では、歴史の探索は聞きこみ調査によって採集した口頭伝承が中心的な歴史資料になる。タンザニア北部の諸部族は、ドイツ植民地統治が開始されるまでは、アラブ人の記録や文献にほとんど登場することはなかったし、また、白人探検家と接触したという記録も残されていない。それは、18世紀から19世紀にかけて一帯は、広大な Masai 族の領域が防壁になって、アラブ奴隷商人の隊商路からはずされておられ、沿岸地帯と断絶していたことが³⁾、原因の一つであると考えられるが、また、当時、Cushite 系部族も Nilotes の Datoga 族 (Barabaiga 支族) も占有領域が狭く、閉鎖的な生活を維持していたことも作用してドイツ内陸経営直前までほとんど、白人社会に知られることがなかったからである。したがって、タンザニア北部に居住する諸部族の植民地化以前の歴史は、口頭伝承だけが唯一の手がかりとして、推論するより方法がない。しかしながら、口頭伝承を歴史資料としてとり扱うことに関しては、多くの異論が予想される。このことについては、川

* この調査は、昭和46年度文部省科学研究費によるもので、隊長は富川盛道教授であった。

田順造氏が「無文字社会の歴史」⁴⁾において詳細に論ぜられているので、筆者がじょう舌を加えることは無意味であり、避けることにしたい。ただ、口頭伝承が直ちに、歴史的事実と結びつくわけではないにしろ、綿々と受けつがれ、語りつがれてきた部族の歴史を、口頭であるという理由で全面的に否定する根拠にもないと筆者は考えている。もし、歴史的に接触した、いくつかの部族を調査し、相互に関連した口頭伝承を照合し、歴史の篩にかけることができるなら、口頭伝承も文献資料や遺跡、発掘物などと同等に考慮されるべき資料的価値をもっており、部族社会の過去を考察する場合の最も重要な歴史資料の一つであると考えられる。

この小論は、このような立場から、タンザニア北部において、南部 Cushite 系諸部族が歴史的にいかに関わり、その後、どのように領域を拡大してきたかということ、呪術師の系譜を中心に考察し、現在、相互に接触している Nilote 系牧畜民 Datoga 族、Bantu 系農耕民 Mbugwe 族などとの歴史的因果関係を明らかにしようとするところもそのものである。採録された口頭伝承は、まだ充分とはいえないが、あえて中間報告としてまとめることにしたのは、部族社会に共通してみられる呪術師に注目し、その存在を媒介にして過去を知ることが、今後タンザニアの地域研究に重要な示唆を与えることになると考えたからである。

I 南部 Cushite 系部族の神話時代

1. 南部 Cushite 系部族の成立

さて、南部 Cushite 系に属する諸部族には、Iraqw 族、Gorowa 族のほかに、タンザニア北部から中部にかけて居住している Burungi 族、Alawa 族、それに Ngamvi 族などが含まれ、また、マサイ・ステップに住む Asa-Aramarik も Cushite につながりをもっており、これらの諸部族は、言語学的には Rift Cluster として一括されている⁵⁾。タンザニア東北部 (Usambara) の Mbugu 族や、ケニア東部 (Tana) の Sanye 族なども南部 Cushite 語系にあげることができるが、現在では、Rift Cluster のようなまとまりが

なく、地域的にも孤立している⁶⁾。

さて、言語学的分類を単純に、部族の歴史に結びつけて類推することはもち論危険であり、検討を要するが、Cushite 語の源境がエチオピア高原であることは異論のないところであり、そこから分裂した南部 Cushite 系諸部族の祖先は、大地溝帯にそって南下し、東アフリカへ入ったということも学界の通説として認められている。非常に古い時代に原 Cushite 語族集団は、5つの主要な集団に分裂したが、南部 Cushi 系の流れは直線的に東アフリカに移動し、おそらく、3000年から4000年前にすでに、ケニア高原に居住しはじめたと考えられている。Cushi 系部族は人種的には Caucasoid であり、Negroid や Bushmanoid とは異なった身体的特徴や文化をもっていたはずであるが、東アフリカに定着後、生存領域を拡大する過程で接触した周囲の Negroid の狩猟民としょじょに混血をくりかえし、現在ではほとんど Caucasoid の痕跡も認められなくなっている⁷⁾。

しかしながら、考古学的な証拠によると、Rift Valleys の遺跡から発掘された人骨は、Caucasoid 系の特徴をそなえており、遺跡は Cushite 人の残した共同埋葬地と解釈されている。Leakey 夫妻によって発掘された有名な Njoro river cave も、石器時代に属する多くの墓地の一つであるが、ケニア北部からタンザニア中部にかけて、こうした Cushite 人の遺跡が多くつらなっている。出土品から判断すると、これらの Cushite 人は農耕を行ない、家畜を飼養していたと推測され、きわめて単純ではあるが、半農半牧的生産様式をとっていた形跡がある。また一連の発掘物を radio-carbon 法 (放射性炭素) によって年代測定すると、紀元前 1000 年という結果が報告されており⁸⁾、当時、東アフリカは、まだほとんどが Negroid 系狩猟採集民の活躍の舞台であったが、高原地帯には、すでに数段高い物質文化を身につけた Cushite 人の集落も点在していたのである。

さて、その後、南部 Cushite 人は周囲に非常に大きな影響をあたえて拡大し、その言語圏は Elgon 山の麓 (ケニア・ウガンダの国境) から

Rukawa 湖 (タンザニア南部) まで、南北に带状に広がり、紀元前すでに最盛期に達したと考えられている。しかし、不思議なことに、Bantu 系諸部族が南方 (ザンビア・モザンビーク) からタンザニアへ進入を開始する以前に、Cushite 語の勢力は衰退にむかい、領域は急速に縮小にいたったのである。このことは、Christopher Ehret が指摘するように⁹⁾、紀元後約 1000 年間に起った東アフリカ史上における中心的な問題であるが、原因は臆測の域を出ず、謎にまつまされたままである。A・D 1000 年までに、南部 Cushite 系の集団は孤立的な小集団に分解してしまい、その後、タンザニアでは、Datoga 祖集団と Rift・Cushite 系及び Bantu 系諸集団の間に、複雑な相互関係が生じてくるのである。Datoga 祖集団は紀元後、間もなく集団を分離する形勢にあったが、まだ、南部 Cushite 系集団とはほとんど接触しておらず、Kalenjin 集団の移動時期に、ようやく、タンザニアにおいて相互に境界領域をもち、接触するようになったと考えられている¹⁰⁾。すなわち、1500 年ごろ、Kalenjin の大移動が起り、現在の Nandi 族、Pokot 族の地を発端として、急速に南下し、ケニア中部を通過して南はタンザニアの Gogo 族の領域に到着している¹¹⁾。しかし、1700 年ごろになると、Kalenjin の勢力もおとろえをみせ、一部は Rift・Cushite に同化し、次ぎにおこった有名な Masai 族の移動に席卷される。Masai 族の領域拡大は Kalenjin の移動の跡に従い、1800 年初頭にはやはり Gogo 族と接触し、ケニアからタンザニアにかけていわゆるマサイ・ランドを形成することになった。Masai 族にも独自の文化が見られたが、多くは Kalenjin の文化を継承し、Masai 族の語彙には Nandi 語系からの借用語が含まれており¹²⁾、類似性の高い文化を形成したのである。

さて、これまでは、言語学的及び考古学的資料を基礎にして過去を考察してきたが、Masai 族の移動開始以後についてはかなり口頭伝承が残されており、東アフリカの歴史をひもとく人類学的な資料を集収することが可能になってくる。Jacobs A. H. は 1790 年代まで溯って、Masai 族の年

代記を作成しているが、口頭伝承の年代決定にあたっては、年令階梯 (age set) を利用しており¹³⁾、また、Datoga 族を調査した富川の報告では、世代 (generation set) が年代決定の指標に用いられている¹⁴⁾。年代階梯制をもたない Iraqw 族の場合は、やはり世代が年代決定の有効な指標になるが、世代は個人の存命年数によって時間的間隔にかなり差を生じ、かつ、一夫多妻婚によって第一夫人の長子の息子たちと第四夫人の長子とが世代が異なっているにもかかわらず、歴史的には、同年代に生きるという位層差がしばしばあらわれてくる。つまり、世代のみをたよりにして口頭伝承の絶対年代を推定することは、著しく正確性を失なってくることにもなりかねない。そこで、Iraqw 族の年代記を作成する場合は、世代間に生ずる時間差を補正するために、直系、傍系を含むクラン系統図によって総合的に比較検討する必要があり、その場合、関係諸部族の口頭伝承と照合することができるなら、なお一層、客観性に近づけることが可能になる。

Iraqw 族には現在、60 数種のクランが存在するが、クランの世代的系譜をたどると、せいぜい 200 年しか溯ることはできない。すなわち、クランの直系出自を溯ってたずねると、10 世代前後でクラン創主に結びつくのである。しかも、クランの起源は Masai 族、Datoga 族、Irangi 族、Isanzu 族など、その数は多岐にわたるが、Shashi 族を除くと現在隣接している部族が大半であり、Iraqw 族を起源とするクランは 5 指に満たない¹⁵⁾。つまり現存する Iraqw 族は、Nilote 系・Bantu 系諸部族との混血による複合部族である。南部 Cushite 系の末裔が部族的核になっているが、人種的にはむしろ Negroid に大きく傾斜しており、外見上はほとんど見分けがつかない。口頭伝承も Caucasoid に由来する神話の類は、まったく消滅し、かつて、中部タンザニアにおいて Rift Cushite 語諸部族が集団的存在していたということを微かに伝えているのみである。口頭伝承によって、Iraqw 族の歴史時代を設定するとすれば、年代決定がある程度可能な、Masai 族との接触以後になろう。

Manyara 湖南端に位置する Mbugwe 族を調査した Gray, R. F. は、この部族の起源と歴史的発展にふれ、Mbugwe 族における首長的地位 (Chieftaincies) の成立は、首長位の世代的系譜とそれに関連した補助資料から推定すると、200 年以上遡るものではないと指摘している¹⁶⁾。つまり口頭伝承と世代の対応関係によって年代を推測し、歴史時代を決定しているわけであるが、Iraqw 族と Mbugwe 族は地域的に地溝帯の斜面を境に接触しており、また歴史的にも関係が深いだけに興味深い一致である。

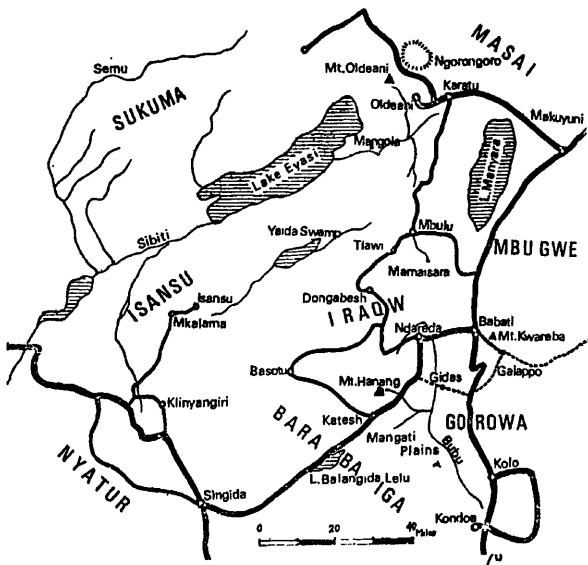
2. Rift Cushete 集団の分裂

ところで、現存する Iraqw 族の世代的系譜が 10 数世代以上は溯れないにもかかわらず、彼らの歴史意識は、Rift Cushite 集団分裂以前まで連続している。Iraqw 族は Rift Cushite に所属する Gorowa 族、Alawa 族、Burungi 族に同類意識をもっており、それは言語学的類縁性とは別に、かつてこれらの Cushite 系四部族が 1 つの集団であったという神話が根拠になっている。Iraqw 族も Gorowa 族も部族的起源に関しては、共通の口頭伝承をもっており、分裂以前の故郷を暗示する最も古く、かつ唯一の伝承として残されている。すなわち、「昔、Iraqw 族の祖先 (分裂以前の Rift Cushite 集団) は、グーセマンガタイ (Guuse maanggatay) という処に住んでいた。そこは、作物がよく実る豊かな土地で、家畜は旺盛に繁殖し、人々は毎日食べ物に不自由な幸福な生活をおくっていた」という。この冒頭の一節で問題になるのは、グーセマンガタイという土地である。Gorowa 族の口頭伝承では、マアングァイ (Maanggwai) との呼称されており、同じ場所をさしていることは疑いないが、しかし現在のタンザニアのどの地点にあたるのか明確にされていない。古老の話を総合すると、現在よりも南方の方角にあり、Kondoa-Irangi 附近であろうと推測されるが、地図上に正確に位置づけることは困難である。マンガタイが神話に残る幻の土地であるのか、あるいは遺跡として現存するのは、今後の考古学的調査を待たなければならないが、現在の Cushite 系部族の住居形式では、お

そらく、痕跡はとどめていないと推測される。しかし、Rift Cushite 語系に属する Ngomvia 族が Dodoma 地域に位置していることから判断して、Rift Cushite 系集団は、現在地よりもいく分南下した、タンザニア中部に定着した一時期があったことは確かであろう。

ついで注目されるのは、「マンガタイには呪術師 Haimu が君臨しており、一族を支配していた」というくだりである。この場合、Haimu は呪術医の人名として用いられているが、Iraqw 語、それ自体では金星を意味しており、Haimu が実在の人物であるのか、あるいは単に、栄華に輝いた過去を象徴するために用いた神話特有の表現であるのか、不明であり、謎につつまれている部分が多い。しかし、Haimu をめぐる口頭伝承は、Rift Cushite 系集団の分裂に関与しており、歴史時代へ移行する微妙な序奏をかなでている。口頭伝承は続く、「人々は平和に暮していたが、ある日、マンガタイの若者たちは退屈になって、敵味方に分かれて集団競技をしたいと Haimu に申し入れた。しかし、Haimu は単に武勇を誇示する競技は認められないといって彼らの意見をしりぞけた。若者たちは再三、同じ要求をくりかえしたが、拒否されるだけなので、ついに、憤懣が爆発し、Haimu の一人息子を拉致し、要求を通そうとした。仕方なく、Haimu は集団競技を行なうことを認めたが、しかし、息子は競技相手をつれてくるまで人質にされ、彼の手にはもどされなかった」Haimu は Datoga 族の土地へ戦士を駆り集めに出発するのだが、Gorowa 族の伝承では、その時 Haimu の家に寄食していた Giteta という Datoga 族の長老がその役割を引き受けている。Giteta は当時、Datoga 族の土地が早魃にあい、餓死寸前のところを Haimu に助けられてマンガタイに住みつくことになったといわれる。伝承の中で語られる挿話や話の文 (あや) には、両部族のあいだでは多少のくい違いがあるが、三日後、Haimu の要請により Datoga 族の戦士が到着し、マンガタイの青年の希望通り、双方、各陣に分かれ戦闘が開始されたという。

「Datoga 族はホーホーと時の声をあげて、マ



第 1 図

ンガタイに攻めこんできた。合戦は拡大し、終止がつかなくなり、Haimu が双方を引きわけしようとした時には、競技がいつの間にか本当の部族戦争に発展してしまっていた。Haimu は戦乱の中で子供を探したが見つからず、マンガタイの土地をすてることにし、戦場を脱出した」という。

Iraqw 族の口頭伝承では、この時 Haimu に従ったクランは、Hay Tipe, Hay Irqa, Hay Tshay, Hay Duwey, Hay Medaha の5つであり、Hanang 山へむかって逃走し、再挙をはかったと伝えられている。ところが、このマンガタイ脱出の伝承は、Gorowa 族の場合、新しい呪術医の誕生と結びついている。すなわち、Haimu はマンガタイにおいて、敗色が濃くなった時、呪術医の資格を象徴する伝来の杖を Giteta に手渡し、支配者の地位を譲ったとある。Giteta は前述の通り、Datoga 族の出身であったが、この争いを和解させることができず Datoga の猛攻に押されて、Haimu 同様 Hanang 山麓に落ちのび、ここに一族を集結させたという。Burungi 族、Alawa 族の口頭伝承は未採録であり、集団を統率した呪術師の名は明らかでないが、間接的な資料によると、やはり一度 Hanang 山に集結したといわれている。このように、マンガタイをのがれた Rift Cushite 集団は Hanang 山に集

結し、合流したが、再度 Datoga 族の攻勢にあり、現存する四つの部族に分裂し、各集団が生きのびる方向を定めて移動したのである。

ところで、Cushite 系集団は Datoga 族の二度目の攻撃を受けるまで、歴史的にどのくらいの期間 Hanang 山に駐屯していたかは明らかでない。しかし、Hanang 山が一般にいわれるように、Datoga 族の山ではなくて、歴史的にいて Cushite 系集団に最もゆかりの深い山なのである。Cushite 系の人々は昔から「巨大な牡牛」あるいは「雨を呼ぶ山」などと、Hanang 山に抽象的な別名を与えて呼んでおり、また、マルモ (Marmo) という成女式 (すでに消滅) に歌われる唱句に「Anang, Gruto, Saga, Qwatsi = ハナン山は母なるグルト、山頂には子安貝という意」とあり、この山に心理的な一体感をもっていることがわかる。特に、Gorowa 族にとっては Hanang 山麓北斜面は、忘れることのできない土地であり、Tangwar-Gorowa (ゴロア族の廃趾という意) という地名のついた場所がいくつか存在するのである。

さて、Hanang 山麓で分裂した Rift Cushite 系集団は、それぞれ安住の地を求めて移動したが、Iraqw 族が Mamaisara に入地した経緯には、次のような口頭伝承が残されている。

「Haimu はクワウィラン (Qaawirang) というところに着くと家を建てた。彼は一頭の牡牛を所有していた。この牛は森の奥へ行って草をはむのが日課であったが、夕方もどってくると、どこで砂浴びするのか、角の先まで泥まみれになっていた。人々は牛が何処でこんなに泥をつけてくるのか、さっぱり見当がつかなかった。不思議に思って、ある男が牛の跡をつけて行くことになった。実は、牛はある湖にかよっていたのであり、男はその湖を見て、牛が泥をつけて帰ってくる理由が分った。帰ってきた男は、牛が日参する場所が湖であると Haimu に告げた。そこで、Haimu 自身が出かけて行き、そして湖を見た。Haimu は呪術師であったので、占いをたてた。その結果に従って、1人の男児を選んだ。名前を Moya といった。Moya は1人っ子だった。Haimu は彼

に魔法の杖を渡し、“湖につくとティタの木（サバンナの常緑樹）がある。この杖でその木をつけ”と命じた。Moya は“もし杖で木をついたら、湖水がぼくをさらっていくのではないか”と問うと、Haimu は“そんなことは決して起らない”と否定した。Moya は出かけて行き、湖につくと、ティタの木を棒でついた。すると湖水は一挙にモーヤをさらって、マンダ・ダウ (Manda Daaw) に移動した。（それで Manyara 湖ができたという）ところで、どうして Moya が選ばれたといえ、1人っ子で Moya という少年とハイムの占いが出たからである。この水が引いた土地に、Iraqw 族は移り住み、現在の Mamaisara (別名 Iraqw Daaw) になったのである。

Mamaisara は、標高およそ 2500~3000 メートル以上の高原に位置しており、山と谷とが複雑な入りこんだ地形と、豊かな水源は集約的な農牧生活を行なうのに適しており、以後、Iraqw 族はここにガヘラ (Gahera) という独特の階段耕作を発達させることになった。Mamaisara が呪術師ハイムによって切り開かれた土地であると、口頭伝承は告げているが、Haimu を創主と仰ぐクラン Hay Tipe は、現在も正当な Iraqw 族の呪術師として、存続していることは事実であり、Rift Cushi 集団に直接由来するクランが、Mamaisara の最初の開拓者であるということは充分納得のいく話である。

同様に、Giteta も Gorowa 族を支配した最初の呪術医として、記憶されており、Harnaa クランの初代の当主として系譜を作成することができる。今、直系中心に子孫をたどると、第1図に示したように 1) Giteta, 2) Qathatha, 3) Tsino, 4) Mayumba, 5) Mayo, 6) Uo, 7) Sige, 8) Dodo, 9) Beo, 10) Zuberi と呪術医の地位は継承され、現在にいたっている。ただし、7代目と8代目、及び、9代目と10代目はやや年代が重複している。それは、7代目の Sige, Uo が早死したため、弟の Dodo Uo が代わって支配的地位についたためであり、それにもとづいて、9代目は最初、弟 Dodo Uo の長子、Beo Dodo¹⁷⁾ がつぎ、やがて兄 Sige Uo の長子、Zuberi が成長

した段階で支配権を譲り、伝来の呪具一切を相続させたからである。したがって、Giteta の絶対年代は実際には 10 世代よりは短縮して計算する必要があるが、精密な補正手続きを踏まなくても、180 年~200 年以前に推測しても間違いないであろう。神話によると Gorowa 族の起源も Harnaa クランの創設にからみあわせ、同一時代と伝えているが、他の口頭伝承と照合しない点がある。たとえば、Iraqw 族の神話では Kwara 山に向った Gorowa 族の集団を統率した男は、Gortoo という名で呼ばれており、Giteta の名はみえない。筆者は Giteta がマンガタイ時代に、Cushite 系集団に流入したことはまだ、疑問をもっている。しかし、いずれにしても Harnaa クランの成立は、Gorowa 族の歴史とともに古く Gorowa 族の初代の呪術師が Giteta であることは、多くの口頭伝承によって証明することができ、Gorowa 族の歴史を明らかにする貴重な資料を提供していることは確かである。

II 南部 Cushite 系部族の歴史時代

1. Iraqw 族における呪術師の起源

このように、タンザニアの Cushite 系部族は、Nilote 系 Datoga 族と地理的に近接しているだけでなく、歴史的に深いかかわりをもっている。とりわけ、呪術医の系譜が明らかになるにしたがい、伝統的な呪術医が、実際は異部族を起源とする外来呪術師であることが多い。このことは、タンザニア北部に居住する Bantu 系諸部族についてもいえる。たとえば、Mbugwe 族の口頭伝承では、政治的支配の基礎は各クランにおかれていたが、これらのクランを統率し、最初、支配的地位についた呪術師は、外来の雨乞い呪術師だったといわれている。Gray, R. F. は、Mbugwe 族に入りこんだ外来呪術医の出身部族としては、Datoga 族、Iramba 族、Isanzu 族をあげている¹⁸⁾。Iraqw 族においても、Mamaisara を支配した最初の呪術医は前述した Haimu といわれているが、以後、外来呪術師によって Mamaisara の支配が続く。すなわち、彼を始祖とするクラン Hay Tipe は、Iraqw 族の正当な

第1表 Gorowa 族の Mganga の系譜

- | |
|----------------------------|
| 1) Giteta |
| 2) Qathatha s/o Giteta |
| 3) Tsino s/o Qathatha |
| 4) Mayumbs s/o Tsino |
| 5) Mayo s/o Mayumba |
| 6) Uo s/o Moyo (独領植民地時代) |
| 7) Sige s/o Uo (英領植民地時代) |
| 8) Dodo s/o Uo (") |
| 9) Amri Beo s/o Dodo (") |
| 10) Zuberi s/o Sige (") |

呪術師の家系であったが、Irangi からやってきた Ido という呪術師によって首長位を奪われ、勢力を失なった。Hay Tipe は現在も呪術師のクランとして存続しているが、一度凋落した呪術師がその後、失地回復した例は、Iraqw 族にはみることができない。

さて、その後、Ido は Iraqw 族の中に姻戚関係をつくり、Hay Karama というクランを創設し、Mamaisara 全域に大きな政治的権力をふるった。しかし、まもなく、その勢力も彼の呪術的能力を超克するものが出現したことにより、住民の支持を失ない、急速に衰微した。口頭伝承によると、「この頃、Iraqw 族の土地に Datoga 族 (Gisamijanga 支族) の Naman という男がやってきた。彼の呪薬は強力で、作物の育成を自由に變えることができ、旱魃で畑が全滅の危機に瀕した時、見事に作物を実らせ、人々を救うことができた。Mamaisara の住民は皆、Naman を尊敬し、その呪薬の恩恵にあずかろうとした。Ido は Naman を憎み、両者は互いに呪術を使って相手を倒そうとした。そして、最後に Naman が勝利を握り、Mamaisara は Naman の支配するところになった」という。

このように、タンザニア北部の諸部族には、高度な政治的組織は発達しなかったが、呪薬を媒介にして呪術師による勢力権争いは活発に展開していた。Gray, R. F. の調査によると、Mbugwe 族も古い時代には、唯一の呪術医だけが雨乞い儀礼を主宰することを認められ、部族全体に奉仕した

といわれる。しかし、ドイツ植民地統治が開始する以前、Mbugwe 族は政治的自主性をもった7つの地域の下位集団に分かれており、各独立地域は例外一つを除けば、モスニガティ (Mosunigati) という呪術的首長 (Chief) によって支配されていた。そして、各部族集団 (Chiefdoms) のあいだでは、激しい対立抗争にあった¹⁹⁾という。こうした首長の重要な責務は、自己の支配領域を豊かに実らすことであり、旱魃のおそれがある時には降雨を呼び、また豪雨を止めて水害を防ぐことであった。ところが、首長は自己の支配領域を拡大するために、他の首長の雨乞いを妨害し、対外地域に旱魃や大雨をもたらし、その住民に被害を与える邪術的能力をもっており、各首長間の呪術をめぐる勢力争いは陰惨をきわめた。つまり、呪術師の能力と呪薬の優劣は、統率する地域集団の規模と密接に関係しており、住民がより強力な呪術的首長に結びつくことによって、各首長間の勢力圏が、相対的に拡大、あるいは縮小するという現象が起るわけであり、Iraqw 族における呪術師の盛衰も、こうした地域集団間の緊張関係を背景に展開してきた。

2. 呪術師, Manda クランの成立

さて、Iraqw の社会はアヤ (Aya) と呼ばれる伝統的な地縁集団から構成されている。アヤは Iraqw 族にあっては、「土地」あるいは「領域」を示す言葉であり、集落の地縁的結合単位を意味する概念である。実際には、アヤ・ゲハンド (Aya・Gehando) とか、アヤ・マンデ (Aya・Mande) というように草分けの名や、地名を形容詞的に語尾につけ、村的集落を呼称している。アヤは自然発生的に成立し、標準的なタイプは内部に約 800~1000 戸程度の屋敷を包摂し、了解された一定の地理的境界を設けて、外界と接している。一つのアヤが占める空間的領域は、周囲の環境によって広狭に違いがあるが、普通、アヤの両端を結ぶ距離は、10 km 以上に及んでおり、内部は地理的接近の度合に応じて、機能的に細分化されている。すなわち、アヤは 4~5 戸のインサウモ・アサレマ (Inslawmo Aslarema=単数)²⁰⁾と呼ぶ、最も基礎的な近隣集団 (Primary neighbourhood)

と、これらの集合した第二次地縁集団 (Secondary neighbourhood) を含む、三重に構造化した地縁集団である。このアヤの構造と機能については、すでに第8回民族学研究大会シンポジウムにおいて報告したので、ここでは省略する。問題は、呪術師もいずれかのアヤの住民であり、呪術師の地位は、アヤの存亡とわかちがたく結びついていたことにある。

歴史的にみると、アヤは地縁的な自衛集団の性格が強かった。Masai 族、Datoga 族などによる部落襲撃や家畜略奪が突発した時、アヤの住民は共同一致して防禦にあたる、絶対的義務をもって、組織的な戦闘に発展した場合は、戦士は呪術師のもとで戦勝呪薬を授与され、戦闘に参加するのが仕来たりであった。Iraqw 族の戦士のあいだでは、「Aru (朝食) を食ったか」というのが、出陣の合言葉だったが、これは呪薬を授受したかどうかを問う当時の隠語であった。このように、非常事態の発生にあたり、住民が呪術師の呪薬にかけた期待は大きく、より強力な呪薬をもつ呪術師に傾斜するのが、アヤのもつ本来的な体質であった。

約 150 年前までは、Mamaisara のアヤはまだ数村にすぎなかったと推定されるが、各アヤの小呪術師とは別に、Mamaisara 全体を総合する唯一の呪術師として、Naman は君臨していたのである。丁度そんな頃、Iraqw 族にとって最大のクランが成立する歴史的な事件が起った。口頭伝承にしたがうと、次の通りである。「Mamaisara のムーライ (Muray) 村の道筋を1人の男が旅の荷物をロバの背に積んで通りかかった。男は身重の妻を同伴しており、旅を急ぐことができず、その日は Iraqw 族の土地に野宿することにした。ところが、その近くに Irqa という長老が牛を放牧しながらやってきて、旅人の有様をすべて観察していたのである。Irqa は、旅人が不思議な威厳をもった人物なので、早速、呪術師 Naman に一部始終を報告し、この土地に引きとめたいと相談した。翌朝、ムーライ村の長老たちは、旅人の野宿した場所に急いだが、一行は見あたらず、一番鶏の時刻にすでに旅出た様子だった。ただ、夜

半に雨が降り、ロバの足跡が点々と続いており、追跡するのは容易だった。ハドの道 (Iohir Hado) まで追いかけて行くと、男は妻が陣痛を起したため、旅を続けることができず、そこに立ち止っていた。彼は人々が近づいてくるのを見て、殺されるのではないかと警戒し、自分が決して他人に害を与える悪人ではないことを知らせるため、平和の象徴である青草をむしりとり、頭上に高くかかげた。人々もまた、他意のないことを男に告げた。Iraqw 語が通じないので、Datoga 語を媒介にして、Iraqw 族の村の住民になってとどまるように説得した。男は断崖 (Rift wall) を下って Mbugwe 族の土地へむかう途中だった。男との話し合いが続いている間に、妻の方が産気づき、ついに、そこで男児を出産した。人々は祝福し、この道筋の名前をとって Hado と名付け、食糧や必需品を与えて Iraqw 族の村人としたのである」。

ところで、この旅人こそ Isanzu 族の Mkalama からやってきた Nkonba・Bin・Molug (Nkamba bim Molugn) という名の大呪術師であり、後にヤンド (Yando) と呼ばれ、Iraqw 族における最大の呪術師のクラン、Manda の創設者であった。しかし、出身地のヤンビ・ムカラマ (Yambi Mkalama) は、Datoga 語では、当時ヤンジユダ (Yanjuda) と呼ばれており、Iraqw 族の人々はこの Isanzu 族の呪術師にヤンジユダの男という通称を与えたが、やがて、ヤンドという Iraqw 語的表現にかわり、Iraqw 族における最大の呪術師クラン、Manda の初代当主は、ヤンドと呼ばれるようになったのである。

3. Manda クランの発展と Manda Hay Bayo の成立

さて、Iraqw 族には Gwaarar Inslawmowok Marafaamo Amor Saw Ngir Gaai (遠い親戚よりは近くの他人という意味) という諺があり、地縁関係が血縁と同様に重視されている。流入した異部族は、すでに、いずれかのアヤに所属し、住民として成員性を確保しなくてはならないし、逆に、偉大な呪術師とわかれば、積極的な受け入れ態勢をとるのが Iraqw 族のならわしである。

Yando が屋敷を作る場合も、まず落ち着き先をめぐり、ムーライ (Muray) とクウェレムトル (Kwermtl) の2つのアヤの間で強烈な口論がくりかえされたという。しかし、Yando 自身は最初、自分を発見した Irqa の隣人となることを希望し、アヤ・ムーライの住民になった。Manda Hay Irqa というクラン名もそこからとられたのである。Yando に始まる Manda クランの呪術師は、あらゆる種類の呪薬をもっており、病魔、害敵の侵入を阻止したり、また逆に招来したり、自由に操作する呪術能力をもっており、また、植物の生育を阻害し、動物の繁殖をさまたげ、死に追いこむ術も知っており、収穫を全滅にすることもできたという。雨乞いも他の呪術師の及ぶところではなく、絶大なる能力を示し、その名声は遠くまで知られるようになった。とりわけ、Manda クランの呪術の特徴は、マオ (Mao=豹) を自由にあやつることができ、主命を受けて豹は間違いない対象を襲ったといわれている。そこで、Mamaisara の多くのアヤは、Manda の呪薬に依存し、次第に Naman から離れていった。最後に、かつて、有力な呪術師であった Hay Naman, Hay Rawi, Hay Karama の居住する地域だけが Manda に従属することを拒否し、自己の領域を堅持した。しかし、Manda クランの勢力圏は、拡大を続け、子孫は代々呪術師として、Iraqw 族社会に君臨することになったのである。現在、Manda クランは、Hay Irqa と Hay Bayo とに分離し、所属する成員はぼう大な人数にのぼり、その系統は複雑多岐にわたり、簡単には系統図を作成することはできない。そこで今、歴史上注目すべき Manda Hay Bayo の成立について考察してみたい。

Hay Irqa の呪術師の系譜は、1) Yando—, 2) Hado—, 3) Gurtu—, 4) Tlanka—, と短期間に当主の交替をくりかえし、5代目 Banga の時代に非常に多くの子孫を残し、Manda クランの発展の基礎がつけられた。とりわけ、Bayo は並はずれな呪術的能力の持ち主であり、クランのなかでもその呪術にたちうちできるものはなかった。他のクランの口頭伝承は、この人物が呪術的立場

を利用し、横暴なふるまいをはじめ、恐怖の的になったと伝えている。すなわち、村の娘を次々に拉致し、正式な婚資を贈らずに強引に妻の1人に加え、子孫をふやし、加えて他人の財産を徴発し、富裕化をはかったという。これが Bayo の悪名を高くし、Manda Hay Irqa から Manda Hay Bayo として、クランが独立した理由である。現在でも古老は、Hay Bayo 一族を大変怖れており、このクランの性格の一端を物語っている。以後、Iraqw 族の社会は、Manda Hay Bayo が首長的地位につき、絶大なる勢力をもって現代に続いている。

III Iraqw 族の領域拡大と呪術師の勢力関係

1. Datoga 族呪術師の移住

さて、ドイツ植民地統治が内陸に浸透し始めた1880年頃になると、Iraqw 族は Mamaisara 外部へ進出し、居住領域の拡大をはじめた。特に、Mbulu, Daudi, Waama といった地域に移動し、新しい集落 (アヤ) を形成し、なお移住人口は増加する形勢にあった。しかし、当時、Masai 族はタンザニア北部を大きく遊動しており、Iraqw 族の集落においても家畜略奪がひびんと起っていた。Mamaisara では、Masai 族の襲撃にそなえてボホン (Bohon) という巨大な坑を縦横に掘り、家畜を守ったが、周囲の進出領域では一層、Masai 族に襲撃される回数が多く、危険度が高かったが、それにもかかわらず、Iraqw 族の新開地進出はおとろえなかった。タンザニア北部において、Masai 族の攻撃を受けなかった部族は存在しないが、1800年頃から1900年頃にかけて、特に、Datoga 族は最も大きな打撃を与えられている。

富川によると、Datoga 族はンゴロンゴロ (Ngorongoro) の火口において、Masai 族との大戦闘をまじえ、ついに惨敗し、小集団に分裂して移動を開始したとある。この時、呪術師 Magena は Sukuma 地域で Datoga 族の再結集をはかったが、しかし、ふたたび Masai 族の急襲を受けて、この部族集団 (Bajuta) は Sukuma を脱出

し、Mbulu 地域に移動したと述べられている²¹⁾。ところが、この時すでに一帯は、膨張してきた多数の Iraqw 族が居住していたが、Datoga 族の移住によって両部族が接触することになり、後世に伝えられる重要な部族関係が成立するのである。すなわち、Datoga 族 (Bajuta 集団) は、呪術師 Saigiro (前述した Magena の長子) を擁立し、勢力の回復をはかっていた。Mamaisara を出て Mbulu 地域に移住した Iraqw 族もまた、一層領域を拡大する形勢にあり、同じ歴史的背景から、交友関係を基軸に両部族の共生的地域社会が成立したのである。

古老の言によれば、1890 年から 5 年間にわたり、Iraqw 族の一部は Mbulu 地区を出発し、Iranba の土地を通り、Sibiti 川を渡って、Meatu に到着、その後、さらに Iwembere Steppe に沿って Semu 川を渡り、Sukuma 地方に移住して、新しい村をつくったという話も残されている。そして、そこに定着した人々は、故郷を記念して村を Mbulu と呼び、子孫も現存するというが、事実は未確認である。しかし、人口増加が動因となって、活発な移住がくりかえされたことは、充分考えられる。その場合、Datoga 族との接触が、Iraqw 族の外界進出を促進する導火線になったと考えられ、それは、Iraqw 族の Sukuma 地方への集団移住が、Saigiro の Mbulu 来住経路を逆にたどったことをみても分かることである。

さて、Mamaisara の外辺に形成された両部族との共生社会は、やがて共同の牛牧儀礼を発達させていった。Datoga 族の呪術師 Saigiro は、牛の疫病に有効な呪薬をもっており、Iraqw 族の間にも、呪薬の授受関係が成立したのである。母村の Mamaisara を離れた Iraqw 族は、本来、農耕よりは牧畜に傾斜し、新天地を開拓して、新しい放牧地を確保することが移動の目的であったが、それは、牛の多頭化が、富者になる可能性に結びついていたのであり、牧畜化 Iraqw 族は Saigiro に結びついたわけである。しかし、こうした現象は、Iraqw 族の首長的地位にある Manda Hay Bayo にとっては、支配権の妨害で

あり、自己の呪術的勢力圏が封鎖されることになるため、Saigiro との間に激しい対立と反目を惹起し、Mamaisara 周辺地域では、住民と呪術師との結合関係をめぐって、一時ひどい混乱をまねいた。両者の争いは、今日も酒席の俗謡に唱われ、数々の有名な逸話を残しているが、結局、Mbulu 北部地域、Waama 地域や Dandi 地域などの Iraqw 族は、異部族 Saigiro に従属し、Mamaisara とその近接地域は、Hay Bayo の勢力圏に組みこまれたのである。

2. 植民地支配と呪術師の処遇

さて、1901 年、ドイツ植民地政府は Mbulu に Boma (政庁) を設置して、Mbulu District にも近代的国家機構による公式な統治が開始された。一般に、植民地支配も初期の段階には、地方によってひどく差があり、Gorowa 地域のように部族的首長や呪術師がそのまま政府の地方行政官に任命される現象もみられたが、Mbugwe 地域のように、呪術師が首長位を更迭され、その中には追放されるものも出るという、まったく逆のばあいもあった。また、部族の内情を知らずに、偶然に行きずりの人物を選定して、役人に採用するといった軽卒な人事もみられた。

Iraqw 族の俗謡には、僥幸で Mamaisara の行政官になった男が、やがて悲劇的な末路をたどって、Iraqw 族の社会から消えていった経緯をうたったものがある。その男とは、Dafi Matu と自称し、古老の話では最初、スワヒリ商人と結託して、象牙の仲買いを職業にして、サバンナを旅してまわる一介の放浪者であった。商売上、スワヒリ語が堪能であり、異部族の社会に詳しく、多くの情報をもっていた。その彼が、Mbugwe 族の土地に滞在していたとき、丁度、ドイツ軍と遭遇し、Mbulu 地域について予備知識のない一行に情報を提供し、Iraqw 族の土地の道案内をつとめたのである。以来、ドイツ政府は Dafi を重く用い、1905 年、ダフィを正式に Mamaisara の首長 (Chief) に任命したのである。彼は、自宅の屋敷の前庭に、ドイツの国旗を掲揚し、威信を誇示した。最初、ドイツ植民地政府によって Iraqw 族に課せられた人頭税は、各自山羊一頭であった

が、Dafi の重要な仕事は、これを徴収し、政府に納入することであった。Dafi の行動は国家権力を背景にしているだけで、住民の信頼を得ることができず、Iraqw 族の間に不満の声が高まってきた。やがて Dafi は本性をあらわし、ソマリ商人を利用して、ふたたび商売に手を出し、金もうけを考えた。しかし、これは失敗し、多額の借金だけが残った。経済的に行詰った Dafi は、自己の政治的立場を楯にして、住民から家畜を徴発し、借金の弁済にあてようとした。この事件を契機に、それまで隠忍自重していた Manda 一族は、Dafi の行動を一斉に弾劾し、Tlaa Lala を代表として、ドイツ現地行政官に直訴させた。その結果、Dafi は失脚し、Moshi に送検され、二度と Mamaisara において彼の姿を見たものはいないという。以後、政府は Iraqw 族における Manda クランの存在を認識し、各地域のチーフを選定する場合、Iraqw 族の居住地域では、Manda クランの意志を尊重して、任用することが多くなった。少数のドイツ行政官が、広い地域社会を統治するためには、部族の真の支配者を発見する必要があったが、Mamaisara では Hay Bayo 直系の Issara の存在が目され、政府に優遇されることになった。彼は、首長の家系であるだけでなく、実際に人物も有能であり、仕事を忠実に実行し、ホワイト・ファーザーからも非常に愛されたといわれる。彼は教育熱心であり、この地域に初めて学校を建設し、文明をとり入れ、Iraqw 族の中に多くの尊敬を集め、部族の発展に貢献したが、1915 年、惜しまれて没した。

ところが、ほぼ同時代、同じく呪術師であるにもかかわらず、Datoga の場合は悲劇的な結末に終わった。Mbulu で Saigiro が没し、長子 Gidamowsa が後嗣となったが、間もなく南下し、Dongobeshi に拠点を移動させた。ここは本来、Gisamijanga 支族の本拠地であったが、Gidamowsa (Bajuta 支族) に呼応して、他の幾つかの支族もこの地域に集中的に移動し、Datoga 社会圏の中心になった。Manda Hay Bayo の呪術勢力圏が、Mamaisara とその近辺に限定され、

あまり伸張しなかったのに比べ、Gidamowsa の勢力は拡大を続け、遠く離れた Waama や Mbulu 地域の Iraqw 族も、ここまで呪薬を求めてやってきた。そして、領域拡大を続ける Iraqw 族の移住の波は、Datoga 族の跡を追って、Dongobeshi に及び、ふたたび、ここにも共生的地域社会が形成されていたのである²³⁾。しかしその背景には、呪薬の授受関係をめぐり、Gidamowsa の隠然たる支配圏が成立していたことは確実である。しかし、Dongobeshi においても、Datoga 族の繁栄は長く続かなかった。1910 年、Gidamowsa をはじめ 11 名の呪術師は、ドイツ軍の鉄砲に呪術をかけたという罪にとわれ、絞首刑に処せられたのである。ほとんど同時代に、Iraqw 族の呪術師が政府に厚遇され、Datoga 族の場合には、弾圧されたのは何故か。本当の理由はまだ明らかにされていない。この事件は、Datoga 族に対しては大きな衝撃を与え、Datoga 族の呪術師の勢力は衰微したが、Iraqw 族の呪術師にとって逆に、有利に展開する機縁になったことはいうまでもない。以後、Iraqw 族は南北へ領域拡大を続け、1920 年代までには、北は Karatu, Oldeani 近辺まで、南は Haimu が北上した経路を逆に南下して、Hanang 山麓に到着し、Datoga 族 (Barabaiga 支族) の領域に侵入している。それは、驚異的な領域拡大であるが、この動因については、すでに別な報告に指摘²⁴⁾しておいたので、ここでは言及しない。

3. 国家統治組織と伝統的支配との交錯

1914 年に勃発した第一次世界大戦は、アフリカにも戦線が拡大されたが、1919 年、ドイツの敗戦に終り、タンガニカは英国の信託統治領にかわった。しかし、Iraqw 族の呪術師が優遇されたことは、独領時代と同様であり、Issara の跡を継いだ Nade・Bea (Manda Hay Bayo) は Iraqw 族の新しい拡大領域にも、勢力を伸張した。また、Gidamowsa などの処刑事件の際、ドイツ軍により、禁固刑を受けた Datoga 族の長老たちも釈放され、Dongobeshi に送還されてきた²⁴⁾。不遇であった Datoga 族の呪術師も、ようやく威信をとりもどし、この頃、Geragendo

(Gidamowsa の子) は Jumbe (村長=Swahili 語) に就任している。また、Gorowa 族では、Chief と Deputy Chief が呪術師 Harnaa クランから任命され、Nakwa, Banga, Gallapo, Gidas の4地域を統轄し、官制上でも支配的地位を堅持した。これとは対照的に、Mbugwe 族の paramount chief は、首長の家系をほとんど考慮せずに選定したため、政治的安定性に欠け、地位争奪をめぐって、さまざまな呪術的事件が発生した²⁵⁾。地方によって、呪術師に対する処遇が異なり差ができたのは、政府の期待する能吏と部族社会の支持する人物とが一致しなかったところであり、Mbugwe 族では異部族が Chief に就任したこともあった。問題は、植民地政府によって推進された地方の統治体制と、呪術師による伝統的な支配関係とが、いかに接合し、遊離したかという点にある。

Mbulu district では、まず district 全域を統轄する Wawutomo (paramount chief) を頂点におき、その下を 13 の division に分割、各 division ごとに Gausmo (Sub-chief) を任命、更に、division を細分し、sub-division を設置し、Yabusmo (minor chief or head man) をおき、ピラミット形の統治組織が成立していた。しかし、当時、Wawutomo には Manda クランとは関係がない Doeata Mikael Aho が任命されており、伝統的な Nade (Manda Hay Bayo) の勢力に抵触することなく両立していた。Nade は、Iraqw 族のなかに隠然たる支配力を持ち、公式には国家の統治機構に参画しなかったが、植民地政府に協力し、後に、King George からの勲章を授与されている。Gorowa 族の場合は、前述したように、Harnaa クランの呪術師が歴代

Chief に就任し、公的な政治的地位を獲得したが、実際の伝統的儀礼や呪薬の分与は、Harnaa クランに準じる。もう一つの呪術師のクラン、Haryambi にゆだねられ、呪術的活動から遊離していった。Haryambi は、Iraqw 族の Manda クランと祖先を共通に、特に、雨乞いに秀れた呪術的能力を発揮し、Gorowa 族全域に勢力圏を拡大していった。このように、呪術師は植民地時代初期には、公的政治職をめぐって、微妙な立場におかれたが、やがて、植民地政府機関の要職についた後、伝統的生活から離れていくものと、土着生活を維持し、呪術的支配に専念するものに分化する徴候があらわれてきたのである。行政権の行使と祭司権の徹底とは、部族社会では、同じ支配関係の範疇に属していたが、植民地支配成立以後は、次元を異にし、やがて併行して存立するようになってきたのである。

IV タンザニア北部の呪術師の現勢

1. 勢力圏の重層関係

現在、タンザニア北部では、南北に带状に広がる Iraqw 族の居住地域が最も大きく、縁辺は Mbugwe, Masai, Gorowa, Nyaturu, Datoga 等と接し、また、それらの一部を包摂する複合共生地帯もあり、呪術師の勢力関係も複雑に交錯し、多層化してきた。Giting 村の例をとっても、呪薬の種類や、事態の重要度、集落 (Aya) の構造、歴史的段階に対応して結びつく呪術師が異なっている。Giting 村は、Gochot, Bagara, Barakta, Hanang, Afandi, Shishied, Murumunang, Endadu, Mande, Sabilo の 10 地域から構成されており、各地域は前述した Inslawmo Aslaremo (火種を共有する近隣関係) を基礎にした地縁集団の集合である。このように、Aya に構造化された中範囲の集団を筆者は、Iraqw 族の第二次地縁集団と呼んできた²⁶⁾。

一般に、呪術師と住民との結びつきは、個人レベルでの直接的結合による場合と、集団レベルでの間接的結合に分けられるが、前者が秘密的、利己的、日常的、非儀礼的、非社会的な特徴をもっているのに対し、後者は毎年一定した期日に、各

第2表 Gorowa 地域植民地統治組織

Chief	Amri Beo s/o Dodo
Depty chief	Zuberi s/o Sige
1. Sub-chief	ya Nakwa
2. "	ya Bonga
3. "	ya Gidas
4. "	ya Gallapo

第3表 Ritual Area of Ghadoweda

local groups	Iraqw	Datoga	total	local leaders	tributes
(the inside of Giting)					
Gochot Daaw	26	4	30	Iraqw	mahindi 10 (debe) maharagwe 3
Gochot	8	4	12	Iraqw	shilingi 12 mahindi 3
Bagara	7	2	9	Iraqw	mahindi 4 maharagwe 1
Barakta	6	1	7	Datoga	shilingi 3 mahindi 3
Afandi	8	3	11	Datoga	mahindi 1.5 maharagwe 2.5
Shishied	4	5	9	Iraqw	shilingi 30 mahindi 4
total	59 (75.6) %	19 (24.4)	78 (100)		
(the outside of Giting)					
Nangwa	5	8	13	Datoga	shilingi 15 mahindi 2.5
Katesh	3	15	18	Datoga	shilingi 45 mafuta
Endasiwaul	1	19	20	Datoga	shilingi 19 mahindi 8
Getaqul	8	9	17	Datoga	shilingi 20 mahindi 7
Endasak	14	11	25	Datoga	shilingi 50 mahindi 6
Getasam	0	10	10	Datoga	shilingi 5 mabaragwe 4.5
Mara	0	8	8	Datoga	shilingi 3 mahindi 3
total	31 (27.9) %	80 (72.1)	111 (100)		mahindi 52 maharagwe 11 shilingi 202
TOTAL	90 (47.5) %	99 (52.4)	189 (100)	Iraqw 4 Datoga 9	

* mahindi=とうもろこし, maharagwe=豆, mafuta=牛脂, debe=18l, 1 shilingi=約 50 円

地域の儀礼集団が呪術師の屋敷に集合し、盛大な儀礼が行なわれるのが常である。今、個人的な結合関係は一時的であり、動機も気まぐれで、しかも組織されておらず、呪術師の勢力圏の形成にあまり関与していない事から、これを捨象し、集団

的結合だけを取り上げることにする。

さて、Iraqw 族では収穫儀礼 (getsan) や割礼式 (tohara)、結婚式 (Duxo) 等の儀礼へ参加する基本的単位は、第二次地縁集団におかれているが、呪薬分与をめぐる Ghadoweda gatumoda

も、この地縁関係を基礎に成立している。これは、Datoga 族の呪術師が主宰する疾病払いの儀礼であり、女だけが参加するところに特徴がある。儀礼の民族誌的な報告は、別の機会にゆずるとして、Giting ではこの儀礼は毎年 6 月末、呪術師 Nahe Fujo (Datoga 族 Sumuheda クラン) の屋敷において、1 晩 2 日にわたり行なわれる。Giting は当時 (1966 年)、成人男子人口の 1 割強 (998 中 103 人) を Datoga 族が占めており、Iraqw 族にかなり同化しながらも、なお、社会的に完全に従属しているわけではない。

Ghadoweda は、本来 Datoga 族の儀礼であるが、Hanang 山麓一帯では、Iraqw 族の居住する割合が高く、Iraqw 族の地縁集団にコミットし、共同儀礼として発達しているわけである。第 2 表に明らかな通り、参加者の割合を全体でみると、Datoga 族がやや多いが、13 の第二次地縁集団を基礎に、年寄りの女によって統率され、当日、呪術師への贈物をもって集団的に参加している。呪術師の支配圏は、このように儀礼を主宰し、呪薬の授与を通し組織された地縁集団の数によって、かなり明らかにすることができる。ただし、Nahe の Ghadoweda の儀礼を構成する集団は、Giting 内部と、Giting に近接する半径 10 マイル以内の地域に限定され、基礎にしている集団が、第二次地縁集団であるため、支配圏も大きくはない。しかし、有力な呪術師になればなるほど、支配圏が広範囲な地域にひろがって行くことは、前述した呪術師の歴史によっても明らかにした通りである。Iraqw 族の雨乞い儀礼が、小地域単位で発達しているが、それにもかかわらず、各地域集団レベルで行なわれる雨乞い儀礼は、最終的には Nade Bea (Manda Hay Bayo) の主宰する部族的規模の盛大な雨乞い儀礼に収斂しており、儀礼を構成する単位は基本的には Aya におかれている。

同様に、病魔が土地へ侵入することを防ぐ Masso Passmo Geyot の儀礼も、Aya を単位に組織され、呪術師と接合する。すなわち、雨乞い、防災、生産など地域住民全体の利害にかかわる諸儀礼は、Kahamusmo²⁷⁾ が長老会議を開き、

Aya の集団的意志をとりまとめ、参加するための準備をはじめ、住民の各屋敷をまわり、一定の金銭を呪術師への謝金として徴収し、また牡牛 1~2 頭を供儀として徴発する。儀礼の当日、Kahamusmo を中心とする Aya を代表する長老数名は、これらの贈物と供儀を呪術師にとどけ、各地から集合した長老たちと合流し、呪薬はこの時に授与される。有力呪術師の支配圏は、このように Aya の代表である Kahamusmo を通して組織されており、呪術師と住民との呪薬の授受関係は、間接的であることが多い。Nade Bea は、その宗教的権威と超自然的能力によって、畏敬されており、その威信は Aya の角々にまで徹底されていた。

こうした呪術師の支配形態は、Gorowa 族や Datoga 族 (Dongobeshi 在住) においても採用されており、Kahamusmo、あるいはそれに代わる仲介者を中間項にして、多くの村落 (Aya) を組織し、勢力圏を拡大してきたのである。タンザニア北部では、Nade Bea は最も大きな勢力圏をもっていたが、かならずしも、すべての Iraqw 族を支配したわけではなく、また、すべての儀礼を独占的に主宰する権利をもっていたわけではない。呪術師は、住民の支持を強制する権利はなく、どの呪術師の儀礼に結びつくかは、Aya の住民の自由な意志にあることは、すでに述べた通りである。Daudi の住民は、Mamaisara の Nade Bea の雨乞い儀礼や疾病防禦の儀礼に参加し、同時に Dongobeshi の Geragendo Gidamoussa の同じ儀礼にも代表を派遣している。Giting では、最初、呪術師 Langay Ishanga (Datoga 族 Qawog クラン) が村内レベルの雨乞い儀礼を主宰し、第二次地縁集団へ長老が集まり、祈雨するが、11 月に入ると 10 数年前より毎年、Gidas に Kahamusmo を派遣し、Gorowa 族の大呪術師 Muna Sora の主宰する雨乞い儀礼に参加している。また、牛牧儀礼では、歴史的に古くから Dongobeshi 在住の Geragendo に結びついている。このように、呪術師は、唯一の人物に一元化されず、呪術師の支配圏はオーバーラップする現象がみられ、参集する部族も交錯している。特に

Muna Sora の雨乞いには、Gorowa 族を中心に、最近、Iraqw 族、Datoga 族 (Barabaiga 支族)、Alawa 族等の他に、Nyaturu 族が加わり、盛大な儀礼に発展する形勢にある。

2. 領域拡大と呪術師の性格変化

さて、こうした呪術師の勢力圏が、部族的紐帯を基礎にしながらも、ドイツ植民地支配が成立する前後から、地域社会の呪術師に性格が変化してきたのは何故だろうか。筆者は、かつて、Hanang 山麓の Iraqw 族が Gorowa 族の呪術師 Muna Sora (Haryanbi) に結びついた要因について、若干考察したことがある²⁸⁾。その際、まず第一に、住民のあいだで呪術師の名声が高いために、第二に呪術師の本拠地が距離的に近くにあること、の2点を一般的理由としてあげておいた。いうまでもなく、呪術師は人格的な存在であり、たとえ呪術師の正当な家系を誇っていても、住民の期待に応じる特殊な能力が発達していなければ、一流の呪術師として、広範囲な地域住民に支持されることはない。Iraqw 族の歴史において、偉大な呪術師として、口頭伝承に名をとどめたものは、並はずれた能力と個性的な人格の持ち主であった。つまり、呪術師の勢力圏はその呪術的能力との関係において、拡大することは確かであり、人々のあいだには、秀れた呪術師であれば、かなり遠隔地へでも呪薬を求めて出かけて行く現象がみられる。しかし、それは人々が、より近くに位置する呪術師に結びつくという地縁結合の原理に矛盾するものではない。何故なら、前節でも指摘したように、呪術師の支配関係は交錯しており、勢力圏は互いにオーバーラップしているからである。

Hanang 山麓の Iraqw 族が、Mamaisara にある Iraqw 族の大呪術師、Nade Bea から遊離し、Gidas の異部族の呪術師 Muna Sora と呪薬の授受関係を結ぶようになったのは、彼の能力もさることながら、地縁的論理が優先したからである。Hanang 山麓から Gidas までは、徒歩で半日行程であるが、Mamaisara までは2日かかる。Iraqw 族の居住領域の拡大に伴ない、当然母村から、辺境線までの距離が長くなり、開拓地

域は求心性を失なっていた。異部族の呪術師との結びつきは、部族の領域拡大と密接な関係がある。Muna Sora の本拠地、Gidas は、Gorowa 族がマジョリティーではあるが、西は南下した Iraqw 族に、南は Datoga 族 (Barabaiga 支族)、東は Irangi 族、更に近年、国道にそって北上してきた Nyaturu 族が Gidas へ入る脇道にそって開拓村を建設し、一帯は複雑な接触領域を形成している。Gidas において、Muna Sora を中心とする超部族的共同儀礼が発達する由縁はここに求められるのである。Iraqw 族、Gorowa 族、Nyaturu 族などの領域拡大の結果、共生、混住地域が広がり、部族間に頻繁な往来がおこり、境界領域を中心に広大な共通の社会圏が形成されてきたのである。呪術師は、部族間に障壁のあった時代とは異なり、所属部族の利害をこえて、地域社会に奉仕することが求められ、その存在理由も変化してきた。

一般に、呪術師は、人間関係が緊張し、生産活動の不安定な辺境地域において住民からかけられる期待もつよく、存在理由も大きい。実際、Haryambi クランが Gidas を本拠地に定めたのは、Muna の曾父 Alito の代であった。それまでは、Gorowa 族の母村である Grallapo にあって、Kwara 山麓一円を勢力圏におさめていたにすぎない。Alito は、Gorowa 族の領域拡大にしたがって、辺境に移住したのである。Nade Bea も長い間、Mamaisara にとどまっていたが、晩年、やはり Manda クラン発祥の地を去って Masagaloda に移住した。こうした呪術師が本拠地を移動させた理由は、表面的には前住地が高原に位置しており、平均気温が低く、長老の健康がそこなわれたからであり、また、財産として所有している沢山の家畜を放牧する場所がなく、牛乳や肉類を獲保できなくなったからだといわれているが、内実、母村はすでに安定しており、貧富の差もないが、将来の発展性も乏しく、儀礼を主宰にしても呪薬の代償として贈られる牛を集めることができなくなったからだと解釈される。しかし、Manda クランにとっては Mamaisara は聖地であり、また、Haryambi クランにとって

は Gallapo が巡礼の地である。Nade Bea は Mamaisara の儀礼には輿に乗って必ず祭司をつとめたし、Muna Sora も Gallopo で祖先祭祀を行なっている。Nade Bea は 1967 年に没し、現在はその直系子孫に祭司権は移譲されたが、拠点はますます、外延の地に移動する形勢にあり、呪術師の地域社会への適応は、領域拡大の著しい部族に特にあらわれたことに注目する必要があると思う²⁹⁾。

文 献

- 1) 和田正平, 1972, 「Iraqw 語・Gorowa 語基礎語彙 500 語の比較」未刊。(「アフリカ部族社会の比較研究」1972, 7月例会にて報告)。
- 2) Whiteley, W. H. 1958, A Short Description of Item Categories in Iraqw. Kampala.
- 3) 一般には、好戦的な Masai 族の襲撃をおそれたアラブ商人が、この地帯を横断することを避けて通ったといわれているが、また、一部のアラブ商人が利益を独占するために、マサイ・ランドの横断が危険であるという流言を、沿岸地帯に広めて、一般の隊商路をタンガニア北部をわざわざ迂回させ、ウガンダへ到達するという、遠まわりの行程をとらせるようにしむけたという説もある。
- 4) 川田順造, 「無文字社会の歴史」(一)(二) 思想 1971, 5. 思想 1971, 7.
- 5) Sutton, J. E. G. "The Settlement of East Africa" Zamani—A Survey of East African History—(ed by BIA Ogot and J. A. Kieran) 1968, Kenya.
- 6) 同上 p. 85.
- 7) 同上 p. 86~87.
- 8) 同上 p. 86.
- 9) Ehret, Christopher, "Cushites and the Highland and Plains Nilotes" Zawani p. 166~168.
- 10) 同上 p. 168~169.
- 11) 同上 p. 170.
- 12) 同上 p. 170.
- 13) Jacobs, A. H. "A Chronology of the Pastoral Masai" hadith 1. (ed by BIA Ogot) 1968 Kenya.
- 14) 富川盛道, 1966, 「Datoga 族の地域集団」——東アフリカの牧畜社会における部族関係——人間人類学的研究(川喜田二郎・梅棹忠夫・上山春平編)所収。
- 15) 和田正平, 1968 「イラク族地域集団の形成過程と変動」——土地占有の諸問題——アフリカ社会の研究(今西錦司, 梅棹忠夫編)所収。
- 16) Gray, R. F. 1963 "Some Structural Aspects of Mbugwe Witchcraft" Witchcraft and Sorcery in East Africa (ed by Middleton, J. and Winter, E. H.) London.
- 17) Beo Dodo は後に、イスラム教に入信し、Amri と名を変え、独立後、初回の国会議員選挙にウンブル・エリアから立候補し、当選している。現在も、政府の要職にある。
- 18) Gray, R. F. 1963, 同上 p. 146.
- 19) 同上 p. 145.
- 20) 和田正平, 1968, 「イラク族地域集団の構造と機能」——半農半牧民の地縁論理——参照。
- 21) 富川盛道, 同上 p. 516.
- 22) 同上 p. 518.
- 23) 和田正平, 同上 p. 298.
- 24) 富川盛道, 同上 p. 519.
- 25) Gray 同上 p. 144~152.
- 26) 和田正平, 同上 p. 311.
- 27) Kahamusmo は土地の草分けであり、最初は土地分割権をもったが、やがて、入植者に対する土地の分割が終了すると、地縁集団を代表し、意志をとりまとめる役割をになって今日にいたっている。
- 28) 第九回日本民族学研究大会 報告要旨「雨乞いと部族関係」民族学研究第 35 巻第四号。
- 29) 「アフリカ地域社会の形成」アフリカ部族社会の比較研究プロジェクト報告 No. 2 東京外国語大学, アジア・アフリカ言語文化研究所。